

ロンドン五輪は 多民族都市の姿を 世界へアピールする



↑地下鉄ホワイト・チャペル駅から徒歩5分ほどの場所に位置する巨大なモスク。ロンドン東部は異文化のテーマパークのようである

←ロンドン東部ハックニー地区に並んだケバブ・ショップ。同地区にはトルコ移民が多く集まっている

写真提供：筆者（以下も同じ）

ながの まさとし
長野雅俊
『英国ニュースダイジェスト』編集長



ながの まさとし ●ウエストミンスター大学ジャーナリズム科で修士取得。ロンドン在住。編集長を務める『英国ニュースダイジェスト』は、英国で創刊されて22年になる週刊日本語新聞（www.news-digest.co.uk）

ロンドン東部の移民たちが 経済発展を支えてきた

ロンドン東部では現在、2012年に開催されるロンドン五輪のメイン会場を設置するための大規模な工事が実施されている。日陰の存在に追いやられてきた同地域に、ようやく光が当てられようとしているのだ。

ロンドン東部は、移民の街でもある。実際その街並みは、さながら異文化のテーマパークのようだ。例えば、ホワイト・チャペル地区という、人口の5割強をバン格拉デシュ出身者が占める地域には、巨大なモスクがそびえ立っている。そこから少し北上した場所に位置するウォルサム・フォレスト地区は、ア

フロ・カリビアンとアフリカ系移民3万人を内包する街だ。さらに隣接するハックニー地区では、トルコ移民が多数を占めており、道路脇には羊肉や鶏肉を串刺しにしたケバブ店が並んでいる。こうした移民こそが、過去数十年の英国の経済成長を支えてきた陰の主役たちだった。

外国人選手ばかりが上位を独占するようになったテニスの世界選手権にちなんで、ときに「ウィンブルドン現象」と揶揄される英国の経済構造は、ロンドン東部の住人たちによって支えられてきたといっても過言ではない。物価高、そして生産性の低迷という都市問題に悩むロンドンにおいて、彼らは低賃金で精力的に働く労働人口として重宝されたのだ。

国立統計局が算出した06年度のデータによると、ロンドンにおける全人口が734万8000人であるのに対して、海外生まれの市民は228万8000人。実に全体の3割が海外で生まれた移民ということになる。内訳をみると、インド国籍を持つ者だけで約20万人、バン格拉デシュ国籍が13万人。また04年1月に欧州連合に加盟したポーランド人も急増している。彼らの子

ホワイト・チャペル地区では、ムスリムの存在が目立つ



どもとして生まれ、英国籍を取得した2、3世も含めれば、さらにその規模は大きくなるだろう。

ロンドン五輪による地域開発は地元再生につながるのか

こうして十分な労働力を確保した英国が経済成長を遂げるなか、陰の主役であった移民たちは、貧困という問題を抱えるロンドン東部に自ずと集まるようになった。ロンドン五輪の選手村が設置されることになったストラトフォード駅からセントラル線とわずか2駅の場所に位置するベスナル・グリーン地区では、貧困の度合いを測る目安となる育児税控除や就労税控除を受けている世帯が全体の約8割を占める。また、近隣地区の小学校では、生徒の大部分が英語を理解できず、通常の授業が成立しないという事例も報告されている。

どれだけ経済の発展に貢献しても、または独自のコミュニティを形成しても、移民たちはいつまで経ってもロンドン東部という舞台袖に押しやられたままなのだ。だからこそ、ロンドン五輪の開催によって、この状況を改善する予定となっていたのだが、この計画

も早速、暗礁に乗り上げてきている。

オリンピック実行委員会によると、ストラトフォードに建設予定の選手村を、五輪終了後には35000戸の住宅として開放し、また一連の建設計画によってロンドン東部に1万名強の雇用を創出するはずであった。ところが、当初24億ポンド（約3800億円）と見積もられていた施設の建設予算が4倍にまで膨れ上がってしまった、すでに資金不足に陥っている。

さらに今後も地価が上昇することを前提として弾き出した8億ポンド強という住宅施設の民間への売却額は、ここにて発生した金融不安により、前提から覆されてしまった。期待された雇用創出についても、より安価にサービスを提供する下請け会社に仕事が流れてしまったことで、地元業者にせっかくの機会が分け与えられていないという事態も起きている。

市民や地域とアートの間にあるバリアーを取り除く

ロンドン東部がこうして政治・経済的な困難に直面しているなか、アートというまったく違った視点から、この地域を再生させようとしている人がい

ストラトフォード五輪の選手村向けに大規模な建設が進められている。五輪終了後、広大な敷地に転用される公園や住宅予定



る。ロンドン五輪の芸術・教育・文化委員会の議長を務めるジュード・ケリー氏だ。現時点では詳細は未定だが、ロンドン五輪においては650に及ぶイベントが開催され、全体で8000万〜1億ポンドの予算が割り当てられる予定となっている。この巨大なプロジェクトを統括する委員会の議長とし



北京五輪において総メダル獲得数47個とい績を取めた英国。10月16日にロンドンで開催されたパレードには、日中にもかかわらず、大勢の市民が詰め掛けた

て選出されたケリー氏は、市民や地域、そしてアートとの間に横たわるバリアを取り除いてきたことで知られる。

「市民とアートを結びつける」という考え方そのものは、あらゆる事象が大衆化された現代社会においては、取り立てて珍しいものではなくなった。ロンドンにおいても「市民参加型のアートの祭典」と題したイベントは常にどこかで開催されているように思えるし、日本でも演劇やジャズでの町興しといった話を耳にすることは多い。だがそうした試みの多くは、「参加型」と銘打っていたとしても、実のところ市民はあくまで観客に過ぎない、というのがほとんどである。

ケリー氏の独自性は、「人間の生命力、特に芸術に親しんでいるわけではない普通の人々の人生こそが、芸術にとって大切」であり、「一般の人々こそ、アーティストの存在を必要としている」(『をちこち』18号より)という、その考え方にある。彼女が02年まで12年間にわたって芸術監督を務めたウエスト・ヨークシャー・プレイハウス(WYP)の例を見てみよう。

まず、彼女は「一般の人」「アーティスト」と選別することが普通の人々の

人生からアートを遠ざけてしまうと、ステージドアを取り去った。アーティストも一般の人も、誰もが一つのドアから入れるような「共有された空間」という贅沢」を持てるようにしたのだ。

WYPでの実践例の一つとして、55歳以上の高齢者を対象にしたプログラム「ヘイデーズ」がある。このプログラムは、5ポンドの入会金で入れるクラブのようなもので、入会すると、劇場内の好きな場所に行き、好きなことができるというものである。例えば、演劇クラスやダンス教室に参加したり、プロの俳優たちと会話をすることができる。そうした場を設けることで、最初はお茶を飲みに来ただけの高齢者がアートに関心を持ち、また、新たな交流が生まれるのだ。このプロジェクトでは、平均70歳のお年寄りを毎週1000人前後集めることに成功した。

対象はお年寄りだけではない。地域の学校と協力して、子どもたちを対象にした「スパーク」というプログラムも行なわれた。これは、芸術とスポーツを勉強と融合することで知識をより深めようとしたもので、ダンスを通して数学を学ぶ、スポーツを通じて物理を勉強する、という異なるジャンルを

融合させる学習プログラムである。「芸術がコミュニティに浸透すれば、住民たちもアートや創造力に対して、無理解や恐れで応じるのではなく、共感と敬意を持って親しむようになる」とケリー氏は語る。現在、彼女は「メタル」という、貧困地区に集めた異分野の芸術家たちにアートの融合を促すというプロジェクトにも取り組んでいる。

老若男女の交流、文化とスポーツの融合、多国籍、貧困地区。まるで彼女のこれまでの活動のすべてが、ロンドン五輪へと向かうベクトルを成しているかのよう思えてこないだろうか。

枠組みだけを用意して、参加者全員でロンドンの文化は何かを考える

ただロンドンで芸術・文化を扱うにあたって大きな課題となるのが、「何をロンドンの文化とするか」である。各国からの移民が集まったロンドン東部には、確固とした「文化」としての形がない。

この問いに対するケリー氏のアプローチは、「フレームワーク(枠組み)をつくる」というものであった。例えば、「ビデオ・ネイション」と呼ばれるイベントを立ち上げることによって、大ま



ジュード・ケリー氏が芸術監督を務めるサウスバンク・センター。2007年に完了した大規模な改修工事を経て、いまやロンドンのランドマークとなっている

かな枠組みをつくる。そして、映画や携帯電話の動画撮影機能といった映像技術を使ったアート作品を募集して、異なるいくつもの文化の形をありのままに提示するのである。



ロンドン五輪の芸術・教育・文化委員会の議長を務めるジュード・ケリー氏。高齢者や子どもたちとアートの間にあるバリアーを取り去るための独自の取り組みには定評がある

または「フェスティバル・オブ・カーニバル」といった、各国のお祭りを集めるイベントを企画し、具体的にどのような内容になるかといった点については、個々の参加者たちの創造性に委ねる。こうした参加型のイベントは、「ロンドンの文化とは何か」という問いに答えるための「合宿」のようなものであるという。

ただ、その「合宿」の成果がどう出るかまでは、彼女自身も見えていない。枠組みがどういうものになるか、もつとくつきりとした形を示してほしいという意見も多く寄せられている。しかし、彼女にとっては、個々のイベントの内容がどのようなものになるかは最大の関心事ではないという。むしろ、枠組みをつくり、参加を促し、多くの人を巻き込むことにこそ、新たな可能性を感じているのだ。

「アートは物を考えることにつながるので、他者との出会いによって、お互いにアイデア、物の見方が変わることに繋がっていく」

つまり、そうした活動を通じて、人々がこれまでとは違った価値観を知ったり、達成感を覚えたりすることに意味があると考えている。何より、オリン

ピックという世界各国から参加者が集まるイベントは、世界に向けて「多民族都市・ロンドン」をアピールする絶好の機会と捉えているのであろう。

巨大な実験場

移民の力によって経済的成長を遂げた英国は今、政治的な混乱が続いている。イスラムの法体系であるシャリア法を英国内の法律として一部適用するかどうかの議論が起きている一方で、移民排斥を打ち出す英国国民党への支持票が増加。外国人への所得税の課税や、移民の労働ビザの申請に対する審査も年々厳しくなってきた。

アートという、一見すると非政治的ゆえに敷居の低い媒体を経て移民たちを表舞台に連れ出したとき、英国人と彼らの間に主役争いが起きるのか。それとも待っているのは、現代病ともいえる無関心だけなのか。

「芸術には社会を変革する力が存在する」というケリー氏だが、アートが現実にはどのような影響を与えることができるのか、ロンドン五輪はこうした大きな実験が繰り返される場所でもあるのだ。